

柏枝真郷

時が過ぎゆ

光風社出版

時が過ぎゆきても

一九九一年九月十日 印刷
一九九一年九月二十日 発行

著者 柏 枝 真 郷

発行者 深 見 兵 吉

発行所 光 風 社 出版

東京都文京区春日二丁目四十一

郵便番号 一〇二二

TEL〇三(五八〇〇)四四五

FAX〇三(五八〇〇)四四五

振替東京八一二九二三

印刷 大 盛 印 刷

製本 越 後 堂 製 本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えます

©Masato Kashiwae 1991 Printed in Japan

ISBN4-87519-359-9 C0093

CONTENTS

AS TIME GOES BY5

WILL YOU LOVE ME TOMORROW ...155

あとかぎ 323

PHOTO BY ORION PRESS ©

AS TIME GOES BY

From the film : "CASABLANCA,,

Words & Music by Herman Hupfeld

© 1931 by WARNER BROS. INC

All rights reserved Used by permission

Rights for Japan administered by

WARNER BROS. MUSIC(JAPAN)INC., c/o NICHION, INC.

WILL YOU LOVE ME TOMORROW

Words & Music by Gerry Goffin & Carole King

© 1961 by SCREEN GEMS-EMI MUSIC INC

Rights for Japan controlled by

TOSHIBA-EMI MUSIC PUBLISHING CO., LTD.

日本音楽著作権協会(出)許諾 第 9170947—101 号

AS TIME GOES BY 6

登場人物

クラーク・デラウェア (デス) ……………私立探偵
アンソニー・フォーセット (トニー) ……その助手兼恋人

ブライアン・トレヴァ }
リディア・ゴードン } ガス爆発で焼死した男女
クリストファー・トレヴァ ……ブライアンの弟
アダム・ゴードン ……………リディアの夫
ハーマン・マークス ……………リディアの父
マシュー・ウエリントン ……ハーマンの父
バーニー }
ネイト } ガス爆発に巻き込まれた学生
リタ }
マンディ } 女になりたかった男

ロブ・コネリイ ……………15分署刑事
アイザック・サイモン ……………同 警部補
ハリス ……………「アンバー」店主
〈サム〉 ……………娼館経営者
ヘンリー・アンダースン ……もと37分署署長

ルイーザ・デラウェア ……………クラークの妻 (故人)
ジェニファー・スミセラム ……受付係
ジェローム・スウェイン ……弁護士

プロローグ

いつそ今、ここから飛び込んでしまおうか。

鉄橋の欄干に手をかけながら、男は思った。あわだつ川面では、粉雪が風にあおられている。濁った大河は低い空のみを映し、川岸の建物から遠い摩天楼まで、すべてを鉛色の渦に飲み込んでゆくかのようにだった。

イーストリバー市西区リバーサイド――

三月の声を聞いても、春まだ遠き日のことである。

川面にかかる鉄橋のひとつでは、その日も、鉄骨を満載したトラックの往来が絶えなかった。下流の再開発地区へ向かうトラックは、タイヤチェーンを重く軋ませ、砂利とエンジン音をはねとばしてゆく。トラックの集団が通り過ぎると、いつとき、橋の上には、まばらな人影だけが残った。

騒音も消え、粉雪だけが橋を舞う。ちらちらと、それは、いましも欄干から川を見おろす男の、亜麻色をした髪にも舞いおりたが、男の関心は季節のうえにはなかった。彼の頭にあるのは、先のない未来のことだけだった。

「胃癌です」

あつざりと、医者が宣告したのは、約二ヶ月前のことだった。お気の毒ですが、と事務的につけくわえ、入院しますか、ともきいた。彼はその事実を理解しようとした。理解しなければならなかったのだ。彼は答えた――いいえ。

トラックの集団が、また通り過ぎていった。騒音に現実へ引き戻され、彼は欄干から手を離れた。あがいても、無駄なことだった。ここで飛び込まずとも、彼は死ぬのだ。そのうえ彼には、まだ十五歳の弟がいる――

彼の足は、鉄橋のたもとへ向かった。川を渡りきると、川沿いの道を川の流に逆らって歩んでゆく。そのことが、彼には妙におかしく感じられた。長いようで短い三十年の、彼の人生はまもなく終わり、彼の時は流れを止めるのだ。

三叉路に、小さな洋品店があった。彼はふと立ち止まり、ウインドーに姿を映してみた。見えたのは、いかにも有能そうな男の姿だ。あまり繁盛していないのだろう、埃に黒ずんだガラスの中に、型の古い礼服が飾られている。彼のコートの下の礼服は、それらより数段も上等に見えた。貸衣裳屋でかなりボラれたが、これも女の頼みとあれば仕方がない。そうだ、女の――

彼は首をふり、腕時計を見た。午前十一時四十五分。女との約束は、正午だった。少し急いだほうがいい。

ふたたび歩きだした男の名は、ブライアンとあった。

女の名は、リディアとあった。

彼女の父が名付けたのだ。

彼女が生まれたとき、父親は仕事だった。埃と鉄屑が浮遊する工事現場で、高く組まれた足場から、陽光にきらめく大河が見えたのだ、という。その水源となる湖の名を、いつか母親になるその日まで、幸せに生きるようにと願いをこめて、彼女に与えた。

今——彼女は二十九歳、三歳になる娘の母親だった。

娘は保育園に預けてある。別居中の夫は勤務中だろう。デパートの貴金属売場で、今日も変わらず、客に愛想笑いをしているにちがいない。

彼女は狭いアパートの一室で、鏡に映る自分の姿を見ていた。

短いブロンドは少しボーイッシュで、きびきびした感じがする。彫りの深い顔立ちは父親ゆずりで、肉づきのよさは母親ゆずりだ。薄く化粧し、仕上げに口紅をひく。鏡をかたむけ、立ち上がり、全身を映してみる。

きれいに見えるだろうか？ あのひとが好きだと言った、淡いブルーのドレス——そう、春の女神のようだと、あのひとは言ったのだ。

彼女は振り向き、ベッドを見た。準備は整っている。睡眠薬も用意したし、遺書を書く便箋もペンの用意もしたし、それから——と、彼女はサイドテーブルに置いた赤いリボンを取りあげた。

薄い絹のリボンは柔らかく、これなら左手でも楽に結べると思う。ひとりでは無理なら、彼に手伝ってもらえばいいのだ。そう、彼に——

彼女は男を待っていた。

安物の目覚まし時計が、正午を告げる。同時に、ドアでチャイムが鳴った。

彼女は唾を飲み込み、歩きだした。寝室から間仕切りを隔てて台所、玄関もない狭いアパートを、世間と隔てるのは、安っぽいドアが一枚きりだ。

ドアの向こうには、正装した男が立っていた。

そして、また——

粉雪がちらつく古い街並を、ふたりの学生が歩いていた。

「見ろよ、このアンケートのいい加減なこときたら。端的なのが、この間五——川の浄化に満足していませんか、ってやつ。答、イエス。これもイエス、みんなイエス。なにが満足なもんかよ」

手にしたアンケート用紙をめくりながら、としかさの学生が舌打ちした。すりきれた革のジャンパーとジーンズが屈強なからだをつつみ、素朴な顔立ちにメタルフレームの丸メガネが、牧歌的な印象を与える青年だった。

「ふうん」と、もう片方の青年がうわのそらで答えた。

同じようないでたちだったが、ジーンズは細い体の線にびつたりと沿い、神経質そうな顔をおおうのは、三色染め分けの髪——たぶん地毛であろう黒髪と、脱色した金髪、さらに染めた赤いメッシュが一部は逆立ち、一部は渦巻きながら腰まで垂れていた。

「ふうん、って、おまえ、すこしは真面目にやれよな。いちおうメンバーなんだし——」

「やりたくて入ったわけじゃないよ。どうせ自己満足に終わるだけのものじゃんか」

「そう思っているかぎり、自己満足でしかないだろうな。おい、つぎはあのアパートだ」

「ネイト！」

「なんだよ」

「わかってんだらう？　なんでオレが興味もない活動に加わっているのか。あんたが——」

「わかっていと言っただらうが。だが、それとこれとは別だ。真面目にやる気がないのなら、かえって迷惑だ」

ネイトと呼ばれた青年は、かたい表情で眼鏡を土手に向けた。

高い堤防が灰色の空をさえぎり、川の流れさえもうかがえなかった。粉雪はやみはじめたが、川風のなかに、ときおり汚臭が混じる。

「くそ……。せつかくの春だというのにな」

積み上げられたブロックは、ほとんど手入れされていないのか、苔がこびりつき、おいしげった雑草には、空缶やビニール袋、その他数々のゴミがひっかかっていた。

どうしてこんなに変わってしまったのだろう、とネイトは思う。十年も昔、この市を出たときは、こんな薄汚れてはいなかった。ネイトが住んでいたのは、対岸の、ごみごみとした下町だったが、あのころは、羨望の目でもって、この高級住宅街をながめていたのだ。いや、それとも、郷愁が思い出を美化してしまっただけなのだろうか。

ネイトが顔をしかめると、その腕を赤いメッシュの青年がつかんだ。

「オレ——嫌い？」

「なに言つて……バーニー……」

振り向いたネイトは、相手が涙を浮かべているのを見て、うろたえた。うつむいた長髪からポタポタしずくが落ちる。頬をつたう涙を拭おうともせず、バーニーはネイトを見つめていた。

「バーニー……」

「……オレ、うれしかったんだぜ、あんたもゲイだってわかったとき……。でも、あんたの好みはオレじゃないんだよな。オレみたいにケバケバしたのは嫌いなんだよな。あんたが好きなのは、あいつみたいなの——」

「また、それを言うのか？ つまらん勘ぐりばかりして。女の嫉妬よりも醜悪だ。くだらんことを言う、ほんとうに嫌いになるぞ」

吐き捨てるようにさえぎり、ネイトは背を向けて歩きだした。バーニーが悪いわけではないとわかっているのだが、つい、肩を怒らせてしまう。

バーニーは、すぐさま追いつがってきた。ふりみだした髪が涙ではりつき、顔の半分以上が隠れている。

「ごめん、ごめん……。もう言わないよ。だから……」

「じゃ——あ、あのアンケート、ちゃんと手伝うから。あのアパートだったよな。オレだつてちゃんとできるんだから」

バーニーは袖で顔をこすり、先に立って歩きだした。おちつかなげに揺れるメッシュをふり、小走りですぐ石段をかけたのぼる。

数年前にできたアパートは、むきだしのコンクリートに湿気がくろぐろと染みをつくり、ゴミバケツが等間隔に並んでいた。それに見え隠れするように、安ペンキのドアが並ぶ。あわてたバーニーは順番を忘れたのか、石段の手前、中央のドア口に立った。

溜め息をつきながら、続いてネイトが石段をのぼったとき——

とおくでチャイムの鳴る音がした。

たしかにした、とネイトは思った。

しかし、それは、その瞬間、轟く爆発音に消された。

焼けるような熱さと痛みが右腕を襲う。炸裂した火花が網膜に焼きつき、そのとき、目の端をかすめて飛び散る三色の毛髪が、いつまでもネイトの記憶に残ることとなったのだ。

黒、金、赤——とりかえしのつかぬ後悔とともに。

祭とともに、春が来た。

「ほんとに、かわいそうだったわ」

「だから、言つてあげたのよ。どこぞの州では同性の婚姻が認められたんじゃないの。いまや、おおつぴらに振る舞うべきよ」

「ナンセンスだね。あれは、ただの哀れみだよ。政治家の保身術さ」

「なにムズカシイ話してんのよ。ほら、パーっとやりましょう。パーっと」

けたたましい声をあげ、割り込んだのは、リタである。棒つきれより細い体に深紅のドレスを巻きつけ、今日のために染めかえたという金髪を細かくカールさせ、このときとばかり塗りたくった化粧顔を陽気に輝かせている。

辛気くさい顔で話し込んでいたグループにグラスを渡すと、その夜なんどめかの乾杯の音頭をとつた。

「春に乾杯、イースターに乾杯、カーニバルに乾杯！ ほら、イースター・エッグ。これあげるから、仲良くやりなさいよ」

いつもとちがう明るさが満ちる、ここはイーストリバー市西区ユアランド四丁目、こぎたない街の地下にある、こぎたないバー「WILD」だ。経営者が「WILDE」と名付けたかったというバーは、看板屋のミスで予定が変わり、内装は穴蔵、食事は冷凍ピッツアとハンバーガーのみという、しけた店となっていた。それでも常連はかなりいる。

春の陽気に誘われ、絢爛豪華に着飾った連中がたむろしている。ただし、ここに集う者は、すべて男ばかりだ。

女装している者、してない者、化粧している者、してない者、なかには羽根飾りをつけた歩く孔雀クワンソウまでがごったがえすテーブルを抜け、リタはカウンターに近づいてきた。

「ハ―イ、デス。楽しんでる？」

「……あいにくと」

仏頂面で答えたのは、かなり長身の男である。正確には六フィート四インチ、枯草をはりつけたようなボウボウ髪で、着ているものといえば、とにかくよれよれだった。

瞳は灰青色で、顔つきは餓死寸前の狼といったところか。浮浪者にも間違われそうな男の名はクラーク・デラウエア、三十一歳で、もと刑事、現在は私立探偵である。

彼がここにいるのには理由があった。つまり、恋人が、男なのだ。

「あら、ご機嫌ななめね」

「悪かったね」クラークはグラスを片手に、手前のテーブルへと目をやった。

楽しそうに声をたて、談笑しているグルーブのなかに、恋人はいた。

つややかな黒髪と緑の瞳――ジーンズにコットンシャツ、若草色のカーディガンという簡素ないでたちをしていたが、歩く孔雀がそばにいてさえ、ひときわ目をひく美貌の青年である。アンソニー・フォーセットといい、現在は二十四歳だが、クリスマスに生まれたためか、まるで雪を結晶させたかにも思える肌をしている。それも乳白色の雪だ。そんな頬を、いま見知らぬ男が指でつつき、アンソニーは切れ長の目で笑い返した。

「……なるほどね」リタが笑いを含んだ目でクラークを見た。